

不適応男児に対する学ぶ態度の形成を目指した 援助のあり方について

— 交流的スポーツ活動を通しての検討 —

Development of an attitude toward learning to a boy with maladjustment

— Through some support in interactive sport activities —

石川 尚子¹⁾ 土川 祐子²⁾

Takako ISHIKAWA and Yuko TSUCHIKAWA

Abstract

The interactive sport activity mentioned in this paper is a term of the supportive activities that the first author has practiced with her advisees for 25 years and it is sport activities in groups based on one-to-one relationship between a child and his/her assistant student and aimed at achieving emotional stability and growing learning ability or sociality. The subject of this study is a 15-year-old boy in the second year of junior high school who came to join this interactive sport activity when he was in the third grade of elementary school and had troubles in studying or the relationship with friends.

In this paper we aimed to expand the knowledge about mechanism of development and what is needed to help development through analyzing his changes that appeared in the interactive sport activity for six years. We focused on what he needed after being cured in his mental condition and gaining basic mental stability in the first half of the six years. In other word we considered the process of how he became ready for learning and secured relieved situation in his actual life.

I. はじめに

学校で問題行動をとる子どもが増えている。近年多いのは、欲求は満たされるものとして欲求のままに勝手な行動をとり、注意されても直すどころか注意を不快・不満として加減のない反発や抵抗行為をとって勝ちさをエスカレートさせる子である。こういう傾向が現れた原因としては、両親が幼児期のしつけの大切さを知らなくて、あるいは知っていてもうまくしつけられなくて、子どもが欲求はコントロールされなければならないことを学んでいないことがまず考えられる。つまり欲求不満耐性が形成されていないのである。石川（1996）はこの現象を、恐れを知らない世代として捉えている。また、学習障害、ADHD、アスペルガー障害などがあって、他者の気持や場の理解がそもそも困難な場合もあるし、そういう原因と育て方の問題が重なっている場合もある。もちろん教師の指導力のな

さが絡むことは多いし、こういう親・教師を育てた社会の問題が根本にあることはいうまでもない。

こういう子たちに対して教師や親が注意や指導をすることで子どもの自己コントロール力が育つことはあまり期待できない。また、子どもの気持を理解し受け止めることこそ肝要であるとして、受け止めてさえいればいいわけでもない。受け止めが必要な状態の時は効果が期待できるが、状態によっては身勝手が強化されることもあるからである。対応の難しい子は専門の相談機関や精神科に繋がれることが多いが、残念ながら専門家に任せれば必ず解決されるわけでもない。処遇によっては非常に悪くも良くなるので、重い先天的障害児以上に処遇は難しく、根気がいるのである。こうして、こういう子らについての理解と処遇は、現在、大きな心理学的・教育学的検討課題になっている。

目的：本研究は、小学校入学当初から学校生活の目的やルールに乗れず、自分勝手に、勉強でも交友関係でも欲求や期待が通らないことを我慢できず、叱られると暴力を振り、事態がどんどん悪循環して、3年生

1) 日本女子体育大学（教授）

2) 日本女子体育大学（教務補助員）

の春に担任から筆者 I につながれた男児に関するケース研究で、筆者達の行う臨床的活動の中で彼が見せた行動を分析することを通して、発達妨害や発達改善のメカニズムを探ることを目的としている。なお、凝り固まった周囲への不信・敵意をほぐすという根本の仕事には約3年という長い忍耐の期間が必要であったが、今回は、そこから先の部分、つまりベースを癒されて前向きになった対象児が、学びの態度を整えながら現実生活の中で安定した居場所を確保していく後半の方に焦点を当てた。それは、えてして癒されて前向きの状態に変わるまでが重視されるが、筆者らは現実には後半部分が同様に重要であると考えているからである。

なお、処遇を検討する時にはアセスメントが重要であるが、専門家の中には各種のテストを駆使してきちんとアセスメントすることを重視する考えがある一方で、ある程度のアセスメントに基づいて処遇し、その結果により再アセスメント・再処遇をする形がベターだとする考えもある。対応に関しても、パターン化して考えようとする人達もいれば、個の処遇こそ根本的なことであるとする考えもある。筆者らは、一次障害の有無や、一次障害の類別を正しくできるか否かに関わらず、二次障害こそが真っ先に特別の処遇を必要とする部分であると考えるとともに、人間のよりよい発達には一定のプロセスがあるとの考えに立って、対象児らが発達のどこまで進み、どこでつまづいているのかを関わりの中で探りながら、局面に応じた処遇を見つけていくスタンスをとっている。

II. 事例の概要

対象児：S 男 小学3年生で初来室。この論文ではとくに中学1年生～2年生に焦点を置く。
<生育歴>

小学校に入学するまで両親は問題のある子供だとは思っていなかったが、入学してみると学習面でも対人的にも自分勝手に、授業には全くのれず、席に座ってられず、立ち歩いて喋って他児の学習を妨害し、注意は入らなかった。他児の親から非難の電話がかかるとその子供をいじめ、5月には学校から教育相談を勧められた。S男の目は陰しくなり、大人が2、3人固まっていると『俺の悪口を言っている』と怒りを顕わにし、大人に対する不信感を固めた。両親がどう注意しても一向に改まらず、大声で叱ったり叩いたりして

いうことをきかせようとするすると激しく反発し、自己中心的な行為はますますエスカレートして、母の目には獣の変化と映った。しかし、ひとしきり暴れて気分が治まると必ず母親に甘えてきて、母が叱ったこと、叩いたことを謝ると、『謝るなら、俺のこと叩くなよ!』と叫んだ。学校側から繰り返し言われ、2年生になって市の教育相談に行くと、そこで障害をほのめかされ(行為障害か注意欠陥多動障害 ADHD を疑った)、児童対象の精神科に繋がれた。病院は診断名を言わないまま、衝動的暴力的行動を抑えるためという薬の服用となった。薬を服用しても荒れた行動が変わることはなく、教科学習に向かう日が来ることなど想像もできなかった。ところが、3年生からの新担任は、S男から授業妨害や暴力行為を毎日蒙りながらも、それまでの学校の考え方や教育相談室の処置に強い疑問を抱き、自ら担任としてS男の心を理解する対応をする一方で、専門機関として筆者らの『交流的スポーツ活動』に繋いできた。筆者 I は、LD か ADHD のこじれではないかと見て、援助を開始した。

III. 交流的スポーツ活動の概要

活動の目的と方針：この活動は、心理学的な問題や障害をもつ子どもたちのために、筆者 I の責任において1981年から継続しているもので、複数の対象児と個別援助者（I 研究室学生）との心理的交流を核として集団でスポーツ活動を行う中で、各対象児の必要性に応じた援助を行い、対象児たちの情緒の安定化がもたらされ、望ましい学習が起ることを目指している。

活動日・活動場所：2 グループあるうち、S 男は一次障害が軽いか無いかのグループにいる。このグループの活動は、毎週土曜日午後3時半から1時間、年間約35回行われる。対象児は12名前後、個別援助者・補助係・I らを入れて約33人の集団活動である。主な活動場所は N 女子体育大小体育館で、器具庫・肋木が付いている。

活動プログラム：運動課題と自由遊びによる構成。前者では身体操作力・技能の向上とともに、場面の認識、指示を聞ける、集団行動がとれる、約束が守れるなど、社会性や認知面の発達を目指す。主な課題は挨拶運動、準備運動、各種の集団ゲーム（事前に計画）、スポーツ技能課題（学校体育教材）であり、交代制のリーダーにより展開される。自由遊び時間を活動の始めと終りに設け、各種の遊具を自由に使えるようにし

て、自由な楽しい活動の展開を期待し、そういう活動のもつ効果を促す。秋の山登り(子ども達とスタッフ)、クリスマス会(親も参加の運動会)も行う。

特別活動：S男を含む3人の子たちのために、交流的スポーツ活動の中に部分的に特設した特別メニューで、レベルの高い課題を体育授業的に行う。

ミーティング、ケースカンファレンス：活動内容の計画・反省などを行うミーティングの他に、子供の状態のアセスメントや適切な対応方法を押さえるために、毎週1ケースずつのカンファレンスを(約90分)行う。

活動記録：個別援助者による記録、VTR撮影。

IV. 経 過

＜交流的スポーツ活動での始めの4年間＞

小3～4年生：来室当初は誰も信用しない顔をして好きなことだけやり、気持の向かないことを誘われる毎に即座に『ヤラネーダヨ!』と拒否し、担当者が何とか関わろうとしてくすぐったりすると『ヤメロッテイッテンダロ!』と叫んだ。ちょっとでも気に障ると『ウルセー』と暴れ出し、過剰な怒りをこめて仕返しをした。Iに肩押さえの技法で暴れを止められると、頭突き、ひっかき、かみつきの『モウコンナトコ二度トコネー!』『バーカ』『ババー、シネ』等の暴言などで凶暴に反応したが、暴れが治まって離されると、Iに対する態度が微妙に変わった。母にはとくに暴力的で、呼んだ時即座に来なかったり、「後でね」とジュースを取り上げられたりすると、髪を引っ張り、パンチした。3ヶ月経過頃からは次第に暴力行為はなくなり、笑顔の時も出てきたが、課題場面では母親の近くやトランポリンの上に座っているばかりで、自由遊びでもたまに他担らと思い切りボール投げをやるだけであった。担当者は「S男、やろうよ」「面白いからやろうよ」と毎回諦めずに誘うが、S男は『イイ』『ヤッテモイミナイヨ』と言うばかりだった。11月頃両親に活動を止めると言ったが、両親に促されて続けた。

小5～小6年生：新担当者になっても相変わらず課題にはほとんど参加せず、みんなのやるのを見ているだけだったが、母に「なぜやらないの?」と訊かれると、「ヤッテルジャン!」と怒った。些細なことで怒って暴れだした時にIがつかまえて再び肩押さえで止めると、10分余り怒り狂った後で治まり、以来、気持の落ち着きを垣間見せるようになり、Iや担当者には素直

な顔を見せ始めた。クリスマス会で発表する組体操が始まった11月末、ポケットに両手を入れてゆっくりとみんなの中に入ったのをきっかけに、ついに全てのプログラムに大体参加するようになった。しかし簡単なものと『ヤッテモイミナイジャン』と言って仕方なさそうにやり、難しいと引いた。他兄とほんの少し関わったが、S男の強い希望で、時々一緒に来て見学していた弟が活動に参加し始めると(弟にも問題があったので受け入れた)、弟ばかりとくっつき、時に大人を遊び相手にすることがあるだけになった。

＜対象期間における経過＞

㊦は担当者で、筆者Tのことである。

㊦担は他の担当者 【 】は筆者らの説明

第I期 中1 4月～5月(5回出席 休み1回)

入室するとすぐに体育館の隅に座り、靴から靴を取り出して体育館全体を見渡しながらゆっくり履き、ゆっくりボールを手にとるとそのボールを離すことなく持ち歩き、蹴って壁にぶついたり、バスケットゴールをめがけて遠くから投げたり、S男に本気で投げ返してくれる**㊦担**や弟に対してぶつけて遊んだ。しかし熱中はせず、一歩引いた感じであった。遊びの時間が終りに近づくとき再び隅っこに座ってゆっくりと靴紐を結びだし、ランニングの合図でみんなが走っても、輪になって行う始まりの挨拶プログラムになっても結んでいた。**㊦**が「みんな待ってるよ、早く行こう」と何度も誘うと、『待たなくていいって、いいよ、始めてよ』とみんなの様子を見ながら怒り口調で言い、仕方なく**㊦**が挨拶の場に歩き出すと、遅れて入ってきた。【楽しい遊びは出来っこないと思っていて、やる気のない動き、仕方なくやる遊びになっている。ランニングは嫌で、何とか入らないで済むようにしているのに誘われてしまい、反発している。】

サーキットやリズム運動になると、リーダーの説明や見本をグラッとした後傾片足重心姿勢で見えて、動き出してからもやる気なさそうに見学の父の方をチョロチョロ見たり、床に貼ってあるビニールテープをはがして丸めたり、プログラムとは無関係の話をしてきたりした。『こんなのやんの』『ツマンネー』とよくいった。弟の姿を探しては近くに行き、自分がやっていないのに『ちゃんとやれ』と注意した。外活動の日もグラウンドに入るとすぐにボールを持ったが、**㊦**がみんなで作っているドッジボールを指さして「一緒に入らない?」と誘うと、少し考えてから入り、『俺は外

野だけ』『ハンデ』と言い、左手で投げ、近くに来たボールに手を出しかけてすぐ引っ込め、やがてゲームから抜け、『中学の美術部の方が楽しい。中学いきて〜』と座り込んだ。しかし走り幅跳びになると意欲を見せて取り組んだ。次の週の外活動でも、走る時や遊び方はタラタラしていて、走り幅跳びの時だけ『絶対遠くに跳ぶ。一番跳ぶよ俺』『この前頑張ったもん』『跳んだ所に旗を立てて』と積極的だった。【全てに参加するが義務的で、やる気のなさを常にもろに態度で示す。ドッジボールは好きなので思わずボールに手が出たようだが、気づいてすぐ引っ込め、走り幅跳びだけしか頑張る意味はないという態度であった。】

第Ⅱ期 中1 6月〜7月（6回出席）

始まりのランニングの時にボールを持ち歩くのを止めさせようと他担が取り上げると、『ヤーメーロー』『カエセー』と怒ったが、なかなか返してもらえないと諦め、代わりにゴムやカギを見つけてポケットに入れていじった。モリモリ体操では『またやんの〜、ヤダ〜』と嫌がって立ち上がろうとしないが、国が先に行くと遅れてガラガラと移動し、「今日は先に進むよ」と言う『うそ？まじで？どうやるの？』とは言うが真面目にやる事はなかった。好きなドッジボールでもコートに隅にガラッと立っていて、国たちにしつこく声をかけられて仕方なさそうに1、2歩前に出たが、ボールを追いかけはせず、側に転がって来た時だけ拾って弟を狙って思いきり投げた。鬼ごっこや転がしドッジボールの時は、ずっと壁に寄りかかったままで、コートに入って動くことはほとんどなかった。【ランニングの時にボールを持つのはサボルためであると見えていたが、別の意味がありそうに思われた。嫌な課題の時はやる積りはあると見せて適当にやり、簡単でつまらないと思うものにはやりたくない態度を露骨にとるのだと思った。】

自由遊びで技専用と決められた方のトランポリンによく乗るようになり、始めは『デキナイ、デキナイ』と言いながら普通に低く跳んでいたが、多種の技の絵と説明が載っている紙を見せたり、連続技の順番を自分で決めさせたりすると、国を相手に練習するようになった。他児が乗ってくるととたんに不快そうな表情が変わって、『もうイヤ』と降りるが、他児がいなくなると戻った。【トランポリンはやってもいいけど「嫌な奴がくるならヤーラナイ」の態度が露骨である。】

第Ⅲ期 中1 7月〜10月（9回出席 休み1回）

ランニング時にボールを持ってガラガラ歩くのを何

とかしたくて、国がS男の真似をしてボールを蹴りながら走ってみるとS男と一緒に走ってきた。集団ゲームはどれもやりたくなさ気で、弟だけしか相手はいないという態度で『ツマラナイ』を連発し、隅に移ったりした。【ボールを蹴りながら走る担当者を見て仲間のように感じて一緒に走れたようであった。とにかく、レベルが低いことをやることに抵抗があることがわかった。】

跳び箱で、始めに基礎練習をするとわかる『こんなやつでも関係ないよ』とやりたくなさそうにしたが、国が「こういう一つ一つの練習が大切なんだよ」と言って先に動いていると、文句を言いながらも一緒にやり、練習内容が変わる毎に『先に見本やって』と言ったり、助走の足のリズムが何度やっても合わない順番がくるまで黙って1人で練習したりした。また、基礎練習場所が2ヶ所あると迷わず弟のいる方に並んだが、そこがレベルの低い方だとわかると難しい方に移った。【基礎練習に対しては、“無駄”との思いと“大切かもしれない”との思いが葛藤している。】

課題の説明中に、突然前々から嫌っている少し遅れのある他児を指差し『オレ、あの人嫌い』と言った。みんなでプールに行った時も、国と会うとすぐに不機嫌そうに『なんであの人いるの。オレ帰ろっかなー』と言った。他方、山登りの時S男の杖を国が羨ましがると、登りながらいい枝を探し続け、良さそうなものを見つけると丁寧に小枝を取り除き国にくれた。中継ポイント毎に国が到着時間と場所を記録していると、『S男、一番って書いて』と言ったり、国がトイレを探していると、ずっと先を歩く知らない登山客に駆け寄ってトイレの在りかを尋ねてくれたりした。【劣っている者への差別感は強く、大事な人だと思う人にはとても気を遣い、大切にす。】

第Ⅳ期 中1 11月〜3月（14回出席 休み1回）

体育館に入る前に廃棄物置き場で弟と遊んで入室をわざと遅らせるようになり、入室後も靴紐をゆっくり結んだり、弟とトイレに行ったりした。課題中にボールを持つことへの執着が減ったが、代りにポケットの中の小物をいじることが多くなった。弟が欠席した時はとくに頻繁にいじった。【ボールやその代理物は気持を支えるものであることがはっきりしてきた。】

モリモリ体操の最中に『次、何やんの？』とよく聞くようになり、国は始めはいちいち答えていたが、次第に練習の中断が惜しくなり、ついに「後で教えるよ」「今は〇〇の時間だから」と強く言った。すると「教

えてくれないなら今日1日グラグラやろ〜』『前の先生はすぐに教えてくれた』と反論し、[田]を無視した。むきになってはいけないと思いつつも[田]が次第に我慢できなくなり、S男から離れて口を利かなくすると、嫌な雰囲気になり、次の跳び箱はお互いに気持ちを切り替えられないままの練習になった。後で[田]は感情的になってしまったことを反省すると同時に、指導法をS男が納得するものに変えなくてはいけないと思い、見本やアドバイスの仕方を習い直すために地域の体操教室に通った。一方S男の方も、モリモリ体操は相変わらずでも、跳び箱では『今のはいい?』とやるごとに聞くようになり、段数の増減などを自発的に手伝うようになった。8段が跳べた時、表情こそ変えなかったが小声で『とべたよ〜』と言った。【態度をとがめられると強く反発するのは、サボりに見える行為でもS男としては努力してやっているつもりだからだろう。また、衝突は互いの発散にもなったらしく、両者の反省と素直さをもたらし、両者の行動を変えさせたようであった。】

課題が大縄跳びになった時、遠くに座って見本を見ながら、突然『オレ、学校で体操教室に行ってるって言ったら、友達にじゃあバク転とかしてるんだ〜?って聞かれてさ…』と小声で話し、『オレ、側転もできないさ』と付け加えた。[田]が特別活動の計画を仄めかすと、『えっうそ!?』と素直に驚いた。【自分はできがよいと思っていることや、学校のみならず同等以上になりたい願いの強さがわかる。】

第V期 中2 4月〜7月(11回出席)

レベルに応じた技能課題を提供することも必要だと判断し、似たレベルのS男、Y君、K君の3人で背面跳びの特別活動を活動時間の一部を使って別の場所で開始した。すると活動に遅れる事はなくなり、「S男、地下に行くよ〜」と誘うと何かしようとしてもマット運びを手伝い、「下には持っていけないよ」と言うとしにボールを素直に置いた。[田]が教わってきたことを生かし、各種のステップを組合わせて手拍子に合わせてウォーミングアップをリードすると、しっかり付いてきた。走り高跳びの基礎練習としてのモモ上げや空間動作の練習が続くとつまらなさそうにマットに倒れ込んだりグラグラしたが、「この後の動きに本当に必要だから」と何度も声をかけると、『うそ?なんで?』と聞き、長く中断はしなくなった。またY君、K君の練習する姿を見て『ヤバイ』と焦り、自ら何度も練習するようになった。しかし助走練習が

上手くいかず脱線しそうになった時、「S男はまず、見本をしっかり見なきゃ」「力が入ってないよ」「もっと意識して」などと大きな声で何度も注意すると、小物で遊びだし、さらに注意すると[田]を無視し始め、活動が終わると1人で黙って退出した。ここで[田]は反省し直し、焦らずゆっくり進める決心をした。【特別組の活動では内容・やり方・テンポなどが中学生的なのでS男は意味があると思って素直である。それでも基礎練習は無駄なことと思えるらしく意欲を下げてサボろうとするが、ライバルたちが取り組んでいるのを見ると慌てる。もっとよく出来てほしいと願う担当者の檄が飛ぶと反発して練習を止めたのは、ヤッテルノニ!という気持と基礎の大切さが理解出来ないことによると思った。】

背面跳びのために、体を限界まで伸ばす感覚を覚える練習をした時、やりかけてすぐ『できないし…』とやめようとしたが、[田]が背中を支えると嫌がらずに練習し、『どお?』『まだダメ?』と聞くようになった。ロイター板を使つてのバー越え練習になった時、バーが上がってY君が失敗すると『足が振り上がってない』と小さな声で言ったが、自分が失敗しY君がクリアすると、『ヤバイ』とロイター板で何回かジャンプをしてみて『ああ、こうなるんだ』と呟いて再挑戦し、クリアすると笑顔を見せた。S男だけができたりすると『オレだけ?』『やったー』と素直に喜び、終りの時間になっても『やるやるやる』と続け、終わると『これ運ぶの?』と率先して片付けを手伝った。【よく理解できないと止めようとするが、補助を受け入れられるようになり、動き方の感覚が伝わると頑張り直せる。他児より上にいきいたい気持ちは強い動機づけになっている】

リズム体操のソーラン節の時、歌を口ずさみ、『これ、金八でやったの見たよ、かっこよかった』とダンスなのだが興味を示した。ただしやはり動きはとても小さく、退屈そうな態度も見せた。【ダンス系は嫌いだが、恰好よいと思えば取り組める。】

弟の行動・情緒が荒れ、Iに肩押さえされている時、弟に近づき『ちょっと緩めればいいんだよ』と優しく声をかけ、[田]の方に戻って『オレも昔あだったんだよな〜』と呟いた。【弟がまずい行動をとる気持も、Iの行動の意味もS男なりに理解できている。】

第VI期 中2 9月〜10月(8回出席)

特別活動メンバー間の親和関係を作ろうと夏休みに鎌倉の海に行った。子供たち間の直接の会話はなかつ

たが担当者を介した会話は交わされ、みんなで乗ったバナナボートがひっくり返った時、先に上ったS男はY君のライフジャケットを掴んで引き上げた。行きの硬い表情は海で笑顔に変わり、後日S男は電話で『あの時、海が怖かったんだよ。でも楽しかった』と話した。【交われないが3人に親愛感は生まれている。】

夏休み後に背面跳びの練習が再開された。両足踏み切りの癖が、足型に合わせたり、バーを下げて片足踏み切りを意識したりと熱心な練習で直ってきた。するとバーの高さが気になり、Y君、K君の方を見ては『むこうもバーが高くなってる。でもこっちよりはまだ低いかな』などと呟いた。最後の練習日に1.15m跳ぶと、『1回だけじゃまぐれかな』と続けて何度も挑戦し、片付けが始まっても、『オレがここ片付ければまだ練習していい?』と倒したバーを走って直しに行き、練習を続けた。【みんなよりも出来るようになれそうだと、いそいそと練習できる。】

特別活動が終り、みんなで行く課題がマット運動になった。国は「一つずつクリアしないと絶対先に進まないからね」と念を押したのだが、ゆりかご、背支持の練習が始まるとやはり面倒臭がり、見本を見ないでやって、上手くできなかった。マットが狭かったので別の場所への移動を誘うと『どこ?』と言って国は指さす方を見たが、『ここでいい』と移動しようとしなかったし、前転や後転で動き方が悪くても『別にきれいじゃなくてもいいよ』とアドバイスを聞かなかった。各種のゲームでは相変わらずグラウンと立っていたり、動かなくていいポジションを選び、そのポジションが他児と重なると『じゃあいいや。やんない』とすぐにその場を離れたりした。綱引きの時のチーム名を見て『これじゃ幼稚園じゃん、オレ中学生だし』と嘆き、『これってソーラン節を思い出す為にやるの?』とか『何の為にやるの?何か目的があるの?それともただ遊ぶだけ?』と聞いた。【今自分が出来たいと思う技能の練習以外は、その技能の基礎だと言われてもやりたくない。ゲームも遊びもこの子たちが相手じゃ勝っても意味がないと思っている。】

国との日常の会話が増え、メールがちょっと交わされるようになった。

第Ⅶ期 中2 11月～12月（8回出席）

始めのランニングでは毎回『今日だけ、お願い』とサボリたがり、許可しないと『これ、何の意味があるの?』と聞き、必要性を自分に納得させてから参加した。国と組んで行く2人3脚や台風の目では、始まる

まではグラグラしていてもゲーム中は自分でかけ声をかけて全力で走ったが、集団ゲームでは国らにしつこく言われるまで座っていた。

マット運動の個別課題としてS男自身がその時最も出来るようになりたいのに全く出来ない倒立前転を選んだ。ところが練習開始日、国に会うなり『指ヶガしたから、オレ今日マットできないよ。ウソじゃないよ、オレの事信じて』と言い、ボールを普段と変わらず投げて遊んでいくせに練習が始まると『見学するわ〜』と1人で隅っこに座った。『見学してちゃもったいないからソーラン節の動き練習しようか?』と国は誘うと、好きではないダンスなのに『やるか』と立ち上がり練習した。次の回でも『まだ治ってないから今日のマットも無理。今日はオレ何すればいいの?見学だけ?』と言い、すぐに嫌そうに『あーこの前の(ソーラン節)やるの?』と続けた。国が敢えて『今日は、ずっと見学していいよ』とそっけなく答え、目の前で練習していたK君の所に混じって練習し始めると、しばらくして『オレ、伸膝後転なら出来るかも』とS男が入ってきて、指を気にすることなくやりだした。そして『できてた?隣り』と同じ倒立前転に取り組むK君の進み具合を気にし、今度は一転して『フェスティバルまで何回練習できる?』と焦り、平日に大学に来てまで真剣に練習し始めた。『これ、やってないと(常に練習してないと)よけい怖くなるんだよねー』とボロッと行って倒立の練習をしたり、『補助して』と頼んできたり、『今のじゃダメ?』と聞いたりして練習を重ね、他国にも助けられてついに倒立前転が成功した時は、安堵の顔をし、嬉しくて握手を求めた国の手にためらわずに手を出し、笑顔で堅く握ってきた。その後は、自分から前転や開脚後転などもきちんと出来るように練習した。『当日、S男の名前が呼ばれた時、大きな声で返事でできれば良いんだけどね』と国が言うと、『大きな声で返事するのってね〜、オレの中じゃ1人でマットやるより難しい……』と少し笑いながらまじめに答えた。【どうしても出来たいと望む技には出来ないかもしれない不安もあるので、そこに直面することを何とかごまかしていた。しかし不安よりできる思いの方が勝ったようで、勇気を出すことができ、成功して素直に喜んでた。】

V. 考 察

交流的スポーツ活動で見られた変化を前半4年間も

視野に置いて概観すると、「学ぶ態度」と「他者関係」に大きな進歩が起っていることが見てとれるが、ここに至っても(1)レベルが低いと見えることやレベルの低い子と一緒に活動はやりたくない、(2)他児との交流は進展しない、という状態であることから、ここにS男の根本的な問題があることが伺われる。

1. 学ぶ態度の形成

S男の学ぶ態度の変化を分析し、態度が内包する心理学的意味と適切な対処法を探る。

課題内容と態度の関係から：リズム体操やダンスは前列でやるのが嫌で、動きは常にグラケていて小さかった。各種の集団ゲームも全くやる気がなくグラケていた。グラける態度は、やれば出来るのにやりたくないからやらないという自己中心性のせいだと見えた。しかし、ゲームはそうだとすると、リズム体操やダンスは、その動きが成果と直結しないためにS男には分りにくく、しかも次々と変化するので付いていきにくいせいもあることが次第に見えてきた。つまり、グラけた態度なので出来が悪くなるとともに、できたかどうかがよくわからないからグラけるのもあるということである。

走り幅跳び、跳び箱、背面跳びには始めから真剣に取り組んだ。ダントツに跳べると思っていたらしい走り幅跳びで、跳んだ距離という明白な現実によってダントツは碎かれたのに頑張り続けたのは、自分が信じていたようにはできなかった事実を認められたことと、頑張ればもっと跳べる期待がもてたからであろう。跳び箱で弟のいる方での練習を選んだのにレベルの高い方に移ったのは、不安のない場にはいたい、それ以上に低いところには属したくないと思ったからであろう。3人の特別活動ということでとりわけ積極的だった背面跳びの基礎練習で、グラケそうになりながら立ち直ったのは、理解しにくかった動きが国語の補助を受け入れたことで感覚的に理解でき、自分で確認しながら練習できたことや、他児をライバルとして意識したからだと思われる。マット運動では、S男が今一番できるようになりたい倒立前転を選んだのににもかかわらず、怪我したとごまかして取り組みから逃げた。出来たい種目だからこそ出来ないことへの不安が大きかったのだろうし、おそらく物理的恐怖もあったと思われるが、深追いしないで待っていると参加してきて、その後は国語の都合などそっこの熱心さで練習した。このように、学校の人々と同等に競えて、しか

も技能レベルが自他にはっきりわかる競争的・達成的課題においては非常に頑張ることから、できる自分になりたい願望が強いこと、その願いのためなら現実が受け入れられ、勇気を出せるようになっていることがわかる。

以上から、取り組む態度は①課題の内容やレベルによって違うが、そこに、②出来るようになりたい気持、③出来具合の予測と結果、④動きの分りやすさ、が絡んでいることがわかる。

学びの場で問題となる行動・態度から：問題となる行動として、常に弟の側にしようとする、ボールを離さないこと、基礎練習を面倒臭がること、ゲームをつまらながって動かないことなどがある。

弟の側から離れない事とボールを離さない事は別の行動だが、心理的には同じ意味を持っていると言えそうである。というのは、S男には集団の中で一人で動くことや他児と協調的な行動をとることへの不安や不審による抵抗があると見られ、そういう気持ちに押し潰されないうために、安心できる弟とくっついてしようとしたのであり、同様にボールに気持ちを紛らわそうとしたのだと考えられるからである。弟は不安の強い時ほど必要だったこと、弟がいないと一層ボールが必要だったこと、ボールの代用が必要だったことなどからわかることである。活動に全部参加するようになっていた3年目の終りに、それまで活動メンバーではなかった弟をどうしても入れさせたがり、来てからはIとの約束を全く守らず常に弟とくっついていたのは、S男にとって必然の要求だったと思われる。つまり、自分勝手に指示を聞かないように見える問題行動の中心に、大きな対人不安があったということである。

一方、スキル練習に真剣に取り組むようになった時に目立ってきたのは、基礎練習を嫌う問題である。例えばマット運動の基礎としての背支持や前転のやり方が悪くても、『できていればいいじゃん』『別にきれいじゃなくていい』と言い、練習しながら『こんなのやっても関係ないよ』とよくいった。基礎練習はスキル獲得の基礎であり、出来る出来ないではなくきちんとやることに意味があるのだといくら説明しても、納得するよりも、レベルの低い簡単な動きの練習だから出来ても意味がないとしか思えず、目指すスポーツ技能そのものを上手くやることばかりに気持ちが向いていたようである。尤も、基礎を無視する態度の底には、この簡単な動きが出来なかったら一層まずいという不安はあったかもしれない。不安や劣等感の強いS男は学校

のみんなよりレベルが低いことを非常に怖れているので、基礎練習を簡単な動きの練習とってしまう間は真剣にやれないのである。

ゲーム拒否も問題だが、これは行われるゲームが簡単でスポーツ技能につながるわけではない以上、仕方のない態度かもしれない。しかしゲームは簡単だから楽しめないというものではないし、弱い子を楽しませる参加のしかたもある。S男がそうできないことは、未だ対人的には鎧を必要としていることを示唆する。

以上から、S男の学ぶ態度の問題の中心には出来ないこと劣っていることへの不安と対人不安があり、それが、学習に取り組む時の葛藤となって問題行動を引き起していると考えることができる。

指導の仕方と態度から：中学1年生で筆者Tが担当になった時には、上述のように、技能課題だけはわりと意欲的に取り組むようになっていたが、やり方や取り組み方には大いに問題があった。しかし、注意すると背かれそうな雰囲気があり、固は踏み込めないで関わっていた。ある時、固がつい取り組み態度を注意してしまうと、S男は不快を露にし、固も我慢が切れてしまった。後になって指導自体にも問題があり、自信のない曖昧な指導だったと気付いた固は、指導法を習いに行き、習ったことを生かして、ポイントを2つ以上言わない、身体に直接触れて感覚をつかませる、練習の雰囲気やテンポに気をつけるなど、あれこれ工夫してみると、S男の集中も持続もよくなった。

ここから、頑張るつもりでいてもわからないとグラけること、わかる指導のもとでは諦めることなく頑張れることが分る。「問題をもつ子が学習に取り組める状態にまで情緒的に回復し得た時には、現実生活の中にその子の居場所を作る主役となるのは、対象とする子どもに合った指導ができることである」(石川, 1988, 2003)と実感される。それは、一層難しいとはいえ、興味を見せないダンスや体操の上達や喜びにも繋がることであるとわかる。

S男の学ぶ態度は未だ問題含みであるが、英語教育のH氏に別途お願いした治療教育的対応の影響も期待できるので、今後もっとよくなると考えられる。

2. 対人関係の発達について

経過：来室時(小3)、最初に対応した助手にすぐ馴染み、担当の学生や思い切りボール投げの相手をしてくれる他担の話しかけにも応じたが、他兄とは全く交わらなかった。遊びは付き添いの親とやりたがる、

新しいことはまず親にやらせてからやる、課題はやりたいものだけ参加する、という様だった。しかししだいに何にも参加しなくなり、親の近くかトランポリンの上で、誰とも関わらずみんなを黙って見ているようになった。これがずっと続いた。3年目、いつも課題からはみ出してしまう体格の良い年上男児(ADHD)がS男を仲間と思ってかスタスタと近寄り、「やろうよ」と課題に誘うと嬉しそうな顔をしたが、動き出してから翻ってしまい、後日にも『デブ』『へたくそ』『臭い』などと言って怒らせてしまったので仲良くなれなかった。同年の緘黙男児K君とボールの投げっこをしたようにした時もあったが、K君の鎧もあって踏み出せなかった。全活動に参加し始めた6年生時から弟がメンバーに入ると、相手は専ら弟になり、他兄との交流の芽は消えた。

中学1年生で筆者Tが担当になった時、筆者がS男に「課題中は弟とくっ付かない」約束をさせるとくっ付かなくなったが、それまでよりボールを離さなくなった。グループ内の精神遅滞児に対する差別感が露であった。2年生で取り入れたS男、Y君、K君による特別活動(背面跳び、海遊び)では、3人の間に親愛感や協力・競争心が生まれたことが3人の様子から察せられたが、1年経っても期待する直接の交流には至らなかった。

以上から、大人たちが自分の敵ではないと思えば割と自然に交われるが、子供同士の交流には非常に強い緊張や抵抗があることがわかる。そして、障害児に対する蔑視は、劣っていると見られることへの強い不安・恐怖の裏返しであり、この不安が他者理解の悪さとともに対人関係のまずさの原因となって、入学後の暴力行為につながっていたことが推察される。

交流的スポーツ活動の効果：初参加の頃のS男は、硬い鎧に身を包んで、他者の気持など全く意に介すことなく、自分の欲求のままに行動しながら、それをまづいとも思っていないようであった。しかし、本活動の保護的空間の中で、約3年間「イヤダ!」を通してほとんど参加せずに他兄たちの様子を見ているうちに、嫌なことでも必要なら努力することや周囲と調和することの大切さをS男なりに少しずつ認識できたと思われる。課題に参加するようになってからのグラダした態度は随分気になるものであったが、考えてみれば、簡単なことや遊び的なことは無意味だけれどやった方がいいんだと判断したからこそその行動だったと言える。これは、学校でのトラブルがほとんどなく

なったことにも影響し、こうして厳しい不適応状態は、始め3年間の交流的スポーツ活動とともに治まった。

今回対象とした後半には、相手の心情に敏感な面があることが分ったが、このことは、対人認知が過敏であったことが自己の劣性への不安・恐怖と結びついて対人認知を著しく歪め、S男をひどくいきり立たせてきたことを推測させる。そして、不適応が治まり、スポーツ技能の獲得によって自分を信頼し始めたことで安定してくると、認知活動が活性化され、英語指導(治療的対応ではあったのだが)を受けられるようになり、これらの相乗作用の中で対人認知の悪さがかなり改善されたように思われる。S男が『大きい声で返事するのってね～、オレの中じゃ1人でマットやるより難しい……』と言うように、未だ1人で何かをやったり人前に自分を晒すのは難しいことであるが、それを口に出せていることは、今後の進路を間違えなければ、この不安からの脱出が不可能ではないことを示すと考える。

VI. 終りに

始めは、学習態度や対人関係に関するS男の問題の主因は自己中心性だと思われたが、交流的スポーツ活動を通して関わっているうちに、むしろ、「他者より劣ることへの恐怖」と「対人認知の歪み」であることが分った。これらは、来室時の主訴である勝手な行動と他者への暴力行為とがほとんどなくなった後も残り、もう一步の克服がどうしても望まれるS男の根源的発達課題であると考え、S男がこの活動は無意味だからと、何回か止めそうになりながらも来続けることが出来たのは、S男にその認識はないだろうが、ここで

は劣等感に脅かされることがなかったことがあるように思われる。

ところで、厳しい不適応状態が治まると、ややこしい根源の問題には周囲も本人も背を向けがちになるものである。自己理解や自己コントロールを学べる場を今後ももてるかどうか、S男が精神の強さをきちんと獲得していけるかどうかの分岐になると考える。

※この研究と本紀要の平井・石川の報告は関連研究であり、その報告では、治療的英語教育を通してわかったことを扱っている。また、これらの研究は、日本女子体育大学平成14年度の共同研究費を受けている。

引用・参考文献

- 1) 福島脩美・松村茂治(1982):「子どもの臨床指導—教育臨床心理学序説」金子書房
- 2) 石川尚子(1988):「情緒発達障害児に対する運動遊びを利用した療育活動の効果とあり方」体育の科学38-8 602-606
- 3) 石川尚子(1996):「恐れを知らない世代」日野市教育委員会教育相談室報 vol. 29-2
- 4) 石川尚子(1997):「子どもを“わかる”ことの功罪」日野市教育委員会教育相談室報 vol. 29-3
- 5) 石川尚子(2003):「情緒的障害をもつ子どもの指導」: 体育授業の心理学 大修館書店 131-138
- 6) 河井芳文(1986):「囲い込まれた子ども達—現代教育と子どものいじめ」田研出版株式会社
- 7) 小口忠彦(1983):「人間の発達過程—ライフサイクルの心理」明治図書出版

(平成16年9月22日受付)
(平成16年11月25日受理)

